福島敏夫随筆集「乙戸南雑話【花鳥風月および星・虹を愛でながら】

主宰論説47
人類生き方思想史原論ー哲学と宗教と芸術と科学の歴史的流れについてー
（完成版）

かけがえのない地球と人類と生物の共存・共栄により、千年紀、いや一万年紀を切り開くためには、これまでの人類史で重要な役割を果たし、今後も大きな影響力を持つと考えられる哲学と宗教と芸術と科学について、相互の関連性も含めて、その歴史的流れと系譜を考えてみるのも、悪くはないし、重要であると考えられる。太古の昔から、多くの人間は、生と死を見つめながら、人生を問い、生きがいと健康と寿命に思いを馳せながら、これらと深い関わりを持ってきたと言えるからである。ただ、人は、生きる過程で、大波小波に見舞われ、ジグサグコースを歩まざるを得ない場合も多い。その際、改めて「夢と希望」が、たくましく生き抜き、「生命讃歌」を奏でる重要な動機（モティベーション）となったと考えられる（パンドラの箱の最後に残っていた「希望」が、艱難辛苦を乗り越えて、生き抜く力となったと考えられる）。国境、宗教、時代を超えて、人類史上に燦然と輝く、【生き方の金字塔」ということを考えておくのも悪くはないし、有用かと思われる。

人類がこの地球上に現れ、洞窟から抜け出して、平地で居住を始めた頃、吹き荒れる嵐などの大自然の猛威の前では、ほとんど無力状態で、とてもそれらを克服できるような状況にはなかったと思われる。もともとの大自然は、決して人間に優しいものではなく、むしろ、その立ち入りを拒絶し、遠ざけるものであった。けれども、火と道具と言葉という3大発明を駆使し、持ち前の頭脳を発揮して、大自然を人類と共存できる半自然に変えることが出来るようになっていったと考えられる（火の上手な使い方で、食材が豊富になり、猛獣を制御できるようにもなったが、使い方を誤ると、火災などの大惨事を招き易い）。それでも、狩猟・漁撈による食料確保という生活形態では、持続可能な余剰生産力は、期待できず、日々の生活で手一杯であり、人生に思いを込めるとか、この世の仕組みに思いを巡らすなどの余裕は、なかったと思われる。農耕・牧畜（および商・工業）による定住型社会への移行とともに、持続可能な余剰生産力も生まれ、「生きるとは？」、「死ぬとは？」というような根源的な問いも、考えるようになっていったと言えるだろう。

その過程で、先ず、哲学が生まれる。哲学というと、最初に浮かぶのは、ギリシア時代の自然哲学である。「万物の根源は水である。」と唱えたタレースや、「万物の根源は、原子である。」と唱えたデモクリトスで代表される「万物の根源は、土・空気・水・火の4元素の組み合わせからなる」とする 、自然哲学のイオニア学派らで代表され る（文献1；ウィペデキア日本語版）（これらは、想念的な物活論で、近代以降の実験的な実証性には乏しい嫌いはあるが、元素に関する先駆的な考えであったと思われる）。次いで、ソクラテス、プラトン、アリストテレスのギリシア中期の三大哲学者の道徳哲学である（文献2：加藤信朗著『ギリシア哲学史（新版）』、東京大学出版会（2024.8））。近代に入って、ルネ・デカルト、ブレース・パスカル、パールーフ・スピノザ、ゴットリート・ライプニッツの流れの大陸合理論（文献3：サイモン・クリッチリー著『ヨーロッパ大陸の哲学』、佐藤透訳、岩波書店（2004.6））と、フランシス・ベーコン、トーマス・ホッブス、ジョン・ロックの流れのイギリス経験論（文献4：『イギリスの経験論哲学』、改訂新版 世界大百科事典、平凡社（2007）から、「純粋理性批判」、「実践理性批判」、「判断力批判」で知られる、旧プロシアのケーニヒスブルグ出身のイマニュエル・カント（文献5：ウィペデキア日本語版、彼は、別に、『永遠平和のために』という論述も、残している。）に始まり 、ヨハン・ゴットリーフ・フィヒテ、フリードリッヒ・シェリング、ゲオルク・ウィルヘルム・フリードリッヒ・ヘーゲルによって完成されるドイツ の観念論（文献6：『ドイツ観念論哲学』、改訂新版 世界大百科事典、平凡社(2007) を経て、フリードリッヒ・ニー チェ、セーレン・キェルケゴールから、ジャン・ポール・サルトルまでの実存主義哲学に到るようだ（文献7：『実存主義哲学』、改訂新版　世界大百科事典、平凡社（2007））。少し毛色が違うが、アメリカでは、ウィリアム・ジェー ムス、・トーマス・デューイの実 用主義（プラグマチズム）という独特の哲学の流れがあるようである（文献8：鶴見俊輔『アメリカ哲 学』、こぶし書房(2008)）。日本では、「諸学の基礎は、哲学にあり。」と言った、井上哲治郎（円了）、「善の研究」で知られる西田幾多郎（京都哲学派のひとり、アメリカの実用主義の哲学の影響もあると言われているようである）（文献9：西田幾多郎著『善の研究』、岩波文庫(2012)）、「人生論ノート」を著した三木 清などの 流れがあるようである。もともと、「生と死」を主要テーマとした論説も、古今東西いろいろなものがあり、宗教の テーマにもなっているが、小説の中で論じたのは、ロシアのドスト

エフスキーが最初であり、その後、ほとんど誰も いないと思われるようである(文献10：フョードル・ドストエフスキー著、『罪と罰』、1866年）。

宗教については、分派も含めて、多種多様なものがあり、論ずるのは、憚れるところも有り、異論も多いと思 われるが、避けて通れないと思われるので、あえて、考えを述べてみたい。ユダヤ教、キリスト教、イスラム 教の三つの重要な宗教は、いずれも、中東の砂漠地帯を起源とする“砂漠の民”の一神教のようである。また、もう一つの大きな宗教である仏陀の“仏の道”も、もともとは、“草原の民”の教えであるようだ。昔のヘレニズム時代のバクトリ アの故地のガンダーラ地方で起こったクシャナ朝のカニシカ王時代を起源する衆従救済を特徴とする大乗仏教が、タ クラマカン砂漠のオアシス経由で北伝し、アジアの各地に広まったようである。もう一つの自力更生を特徴とする小 乗仏教は、南伝の形で、東南アジア諸国に広まったようである。別に、中国固有の無為自然を説く道教、インド固有 のヒンズー教、旧ペルシア固有の二神論に立つ拝火教（ゾロアスター教） （文献11：松本清張が、『火の路』、文春 文庫(2010)）で、日本までの伝来過程を論じているようである。北九州市松本清張記念博物館所蔵）、世界各地で見られる山岳信仰（日本の山伏信仰も、その系譜である。）などが上げられる。農耕社会や漁撈社会、森林社会や山岳 および海洋社会では、大分部は、色々な自然のものに精霊が宿るという精霊崇拝(アニミズム)の考えを基礎とする多 神教の方が多いようである。北欧神話では、オーディンを主神とする多神教だし、ギリシア神話では、ゼウスを主神 とする多神教だし、日本の神道も、天照大神を主神とする多神教である。どちらも、信仰対象が違うだけで、人間の 思考を超えたものの存在を認めることと位置づけられていたもののようである。

芸術の系譜と流れについても、少しは、述べてみたい。黎明期の頃から、人間は、日々の生活の合間に、絵などを描いて、自分が目にして印象に残ったものを、芸術として、残そうとしてきた。古くはアルタミラの洞窟 やラスコーの洞窟の動物の壁画が知られている（文献12：ラスコー洞窟壁画、世界史の窓、教材工房(2010)）。 また、自然石および加工石、埴輪、土偶などの形で示される原始彫刻がある。ただ、一口に芸術といっても、絵画、彫刻、陶芸、建築などの造形美に関するアポロン的なものもあるし、和楽、西欧音楽、世界各地の民謡など、 聴覚に由来する陶酔美に関するディオニソス的なものもある。能・狂言、歌舞伎、踊りなどの中間的なものも ある。世界各地には、地域、民族固有の特色ある芸術も多い。ただ、世界史を眺めると。「美の巨人達」も、西 洋芸術と東洋芸術に大別されるようである。絵画に特定してみると、西欧の印象派画家のクロード・モネ、、フ ィンセント・ファン・ゴッホ、抽象画の 巨匠パブロ・ピカソ、中国の南宋画の馬遠、夏珪、日本の水墨画画家 の雪舟、襖絵画家狩野永徳、富岳三十六景等の 葛飾北斎、日本の風景画家の横山大観、日本の近代美人画家の 東西の巨匠といわれる上村松園と鏑木清方（文献13： ウィペデキア日本版）など、この類の人は、枚挙に暇が ない)。もともと、絵画や彫刻は、偶像崇拝の禁止の教えで、青色のモスクという建築芸術を除いては、ほとん ど目立った名作が見られるないイスラム圏を除き、宗教的な教えを 目に見えるようにして、その教えを普及させようという意図とそれへの協力の形で発達したようである。キリスト教 教会の天地創造のフレスコ絵や聖母 マリア像や、仏教における仏陀像や観音菩薩像が、その系譜である。彫刻では、 ミケランジェロ・ブオナロー ティのダビデ像や、シルクロードの敦煌、雲崗における石窟仏像が上げられる。日本で は、法隆寺金堂の釈迦 三尊像（文献14：『釈迦三尊』（魅惑の仏像3）、毎日新聞社(1986)）などが、上げられる。ルネッサンス時期で は、宗教からの解放と人間讃歌をテーマとしたいろいろな絵画や彫刻が花開いた。ラッファエロ・ サンティ、 ミケランジェロ・ブオナローティのキリスト教会の円天井に描かれた、天地創造に関わる天使らの群像の 天井 画、レオナルド・ダ・ビンチの最後の晩餐やモナリザ像が上げられる（これらの絵画に関しては、いくつかの謎 もあるようである；文献15；ロバート・ラングドン著『ダ・ビンチ・コード』、角川書店（2004））。建築では、ロマネスク、バロック、ゴシック、ロココ様式の流れがある。建造物としての芸術性だけでなく、その文化的背景を考える必要があるようである。ヨーロッパ各地のいろいろな宮殿、教会、城郭等に反映され、多様性に富んでいるよ うである。

また、科学についても、新たな視点から、少し、考えてみたい（最近では、技術と表裏一体をなすので、科学技術とひとくくりにした方が良いのかもしれないが、本来は、自然界の諸々の現象や仕組みに対する法則性、あるいは森羅万象に内在する成り立ちの機構に対する知的好奇心の対象として、科学があるので、技術とは、やはり別にして考えるべきものと思われるので、科学ということにしたい。）（ただし、工学となると、科学的知見をもとにして、創意・工夫により、技術的革新を目指し、人類に有用なものや技術を提供し、生活等を便利にするという目標があり、自然に対しても、ただ融合するだけでなく、そのきしみ等の改善を図ることを目標にする面もあるようである。熱力学に見られるように、科学は、工学から多くの恩恵を受けた逆の例もある。多くの科学法則は、現象の理解と説明のための仮説に過ぎないと言われる。その中で、唯一、厳然とした法則として確定しているのは、熱力学第二法則のエントロピーの法則だけだと言われるようである。また、いろいろな物理的量のばらつきを考慮しないと、信頼性が得られないということで、統計力学が必要になる(文献16： 岡部 豊著、『熱・統計力学』（朝倉物理学選書4､朝倉書店(2008)、また、物理学と化学の境界領域として、化学物理および 物理化学があるようである。）ニコラウス・コペルニクス、ガリレオ・ガリレイに始まる近代科学（文献17：ガリ レオ・ガリレイ著、『新科学対話』田中一郎訳、岩波文庫（上・下）(1987)）は、いろいろな流れを経

由しながら、現代科学に至るようだ(文献18：アイザック・ニュートン著、中野猿人 訳『プリンシピア―自然哲学の数学的原 理』、講談社(1977)、文献18：ジェームズ・クラーク・マクスウェル 著、竹内薫訳『電気論の初歩』、シャムハ トプレス (2006)、文献19：朝永慎一郎著、『量子力学と私』、岩波文庫 (2010) 、文献20：真船文隆著、『量子化 学』、東京化学同人 (2007) 、文献21：谷口尚司著『材料工学のための移動現象論』、東北大学出版会 (2001) 、 文献20：化学便覧基礎編 改訂版第6版、第12章、反応速度式と速度定数、日本化学会 (2004) 、文献22：相対性理 論と量子論、佐藤勝彦監修、PHP研究所(2006) 。科学と文学の接点というのも、あるかと思われる。昔、詩人ゲーテが、水ガラスの溶液に、鉄、コバルト、ニッケルなどの鉄属イオンを加えると、青色、エメラルド色、瑠璃色などの、美しい沈殿が生じる事を知り、非常に魅了されたという逸話が、残っているようである (文献24：ヘルマン・マイヤー著『「水ガラス」奥田 進訳、コロナ社(1950)、文献25：ケミカル・ガーデ ；ウィペデキア日本語版) 。ただ、科学も、自然科学だけでなく、人文科学、社会科学もあり、その裾野は、かなり広いようだ。欧米型の科学は、哲学や宗教からの脱却を目指して発達したものである。知的好奇心を満足させ、この世の法則性を解き明かし、物質的な豊かさと日常生活の利便さを提供し、人に幸せをもたらしたという。ある程度、大量生産、大量消費、大量廃棄型の物質文明と生産体系に支えられ、人類に未曾有の繁栄をもたらした功績は、大なるものがあるようだ。しかし、昨今、地球環境問題、資源・エネルギー問題、廃棄物問題、人工知能 (AI)問題など、いろいろな問題が露呈し、持続可能な開発目標 (SDGｓ) への実効性のある有効対応も含めて、大きな見直しが必要になっているようだ。連携、協奏、融合等が唱えられることもあるが、哲学と宗教と芸術と科学は、時折相互作用を通じて接近することがあっても、今後も、競合し、相互に影響を受けながらも、平行して進むものかもしれない。

自由短歌：

山川海恵みと猛威相半ばされどもなつかしゆりかごのもと

自由短歌

人たるに燦然と残った文化遺産火道具言葉が支えし人類史

令和7年12月9日
思い出して追記

これまでの半生と生き方を思い起こすと、「身を立て､名を上げ・・・」と言う教育理念のもとに育ってきたが、やはり、「夢と希望」と「知的好奇心」を持って、懲りず諦めずに、自分のやりたいことを追求し、貫くことの大切さが、重要であるんではないかと思う次第である。知力・体力・学力の他に、生命力というものも大切であるが、「世のため人のためにやる」というのに拘らず、「興味がもって、やれそうなこと、やりたいことを」を見つけ、それを、なんかの形で継続的にやれば、結果的には、世のため、世界人類のために、後世の人類の子孫のためにもなると考えられる。先人らが考え方、生き方、行動の仕方に学び、敬意を表し､尊重し､踏襲しながらも、未来を展望する道筋を見いだす術を考えることが､大切と考えられる。

追記：
2026年5月10日

太古の昔から続く人類史で、いろいろな人が、どのような事を考え、どのような行動をとったのか、先人に学びながらも、それを超える夢と希望の筋道を見いだすことも、重要であると思い、この論説を書いてきました。大筋の流れについてのレビューは、間違っていないと思います。ですが、最近、いろいろな想定外であった流れも多くなってきました。それ故、全体的な見直しと加筆を行ったものです。

人工知能 (AI)に関連した話題が、多くなり、社会的な大変革の時代を思わせました。特に、生成AI, チャッ トAIなど、人工知能の長足の進歩とととともに、機械学習等による、実験的に得られ難い物性データや、微視的内部構造の推定等の有用性の反面、著作権・知的財産権の侵害、偽情報の拡散、創造性への悪影響等のマイナス面、データセンタ ーのフル稼働に伴う電力消費量の世界的な際限ない拡大の懸念が、指摘され、改めて、人工知能 (AI) のありかた、対応の仕方が、問われるようになりました。人工知能(AI)の“光と影”への的確な対策を考えるべきと考えられます。国内および異国からの一見目に見えない形での著作権・知的財産権の侵害も、結構多くなりました。創造性とオリジナリティーの問題を、改めて、考えさせられました。手塚治虫医学博士が、そのライフワークとした《火の鳥》の漫画の未来編で、人間が自ら判断することをやめて、コンピュータに頼り過ぎたときの結果について、警鐘を鳴らしていたことを思い出す。人工知能 (AI) が一人歩きして、制御不能になった場合の危険性を予想していたもので、改めて、先見の明のあった人だったと、偲ばれる。

もう一つの大事な問題は、地球のきしみによると思われる、頻発し、激甚化する天変地異に対する実効性のある対応と防災・減災対策の話である。生き方を考えるにせよ、人類だけでなく、生きとし生けるものの基盤となっている大本の地球のきしみが、ここにきて、想定外の規模にまで拡大していると考えられる状況である。どのような形での解決を図るか、人類の英知が問われているようだ。

また、生き方を論じる際、いのちと寿命と生き方の相互の関連性が重要になり、その三点セットで考えてゆく必要性も増しているようである。限られた寿命の中で、如何にして、おぞましくても、心ゆく充実した道を探るかが、大切になるようだ。

令和7 年5 月12 日初稿
令和7 年5 月13 日脱稿
令和７年５月１７日再脱稿令和７年５月２１日再修正
令和7 年6 月２日大幅見直しと再修正・再構成
令和７年７月11 日全面的見直し令和７年８月9 日夜引用文献明示
令和7 年8 月13 日夜文章の校正と引用文献の精密チェック改訂
令和7 年8 月23 日文献の通し番号と刊行年の再度チェック版
令和7 年8 月27 日夕方文献の通し番号と刊行年及び整合性の再度チェック版 9月
令和7 年8 月28 日夕方文献の通し番号と刊行年及び整合性の再々チェック版
令和7 年8 月29 日正午引用文献の精査化と通し番号のチェック、引用人名の姓名の明示化
令和7 年9 月4 日午後引用文献の精査化と通し番号のチェックおよび引用人名の姓名の明示化最終チェック令和7 年9 月７日午後 引用文献と人名の再校正
令和７年９月９日夕方 引用文献の刊行元・刊行年および引用人名の姓名の精査
令和７年１２月９日 思い出し事項追記
令和8年5月10日新しい動向を考慮した追記

令和8年9月11日　手塚治虫氏への医学博士の称号追加
令和８年１０月６日誤字・脱字、不要な空白等修正